

5.大沢・上大沢の間垣の現状

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/6959

5. 大沢・上大沢の間垣の現状

亀 井 望

1. はじめに
2. 間垣の作り方・材料
3. 間垣の補修
4. 大沢の間垣と上大沢の間垣
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに

「間垣」というものをご存知だろうか？私は調査へ行くまで全く知らなかった。行く前に「間垣がある」と聞かされても想像すらできなかった。これを読んでいる人にもそんな風に間垣のことを全く知らない人も多いと思う。そこでまず、間垣とはどういうものなのかを説明したい。

間垣は海岸線にある大沢と上大沢で見ることができる。冬の厳しい北風から家々を守るために作られた竹を並べた囲いである。K さん（60 歳代、男性）の話によると、間垣は風を防ぐものではなく、緩衝材であり、風の方向を変えるものである。竹を並べた間垣には隙間があり、そこを風が抜けていく。ただの塀であれば、あまりにも強い風のせいで倒れてしまう危険性もあるが、間垣が倒れるということはない。また、竹はしなるため、風で飛ばされる心配もないのである。



写真1 上大沢の間垣

大沢や上大沢では「間垣はずっと昔からあった。集落ができて、強い風を防ぐための知恵からでき

たんだろうね」(80 歳代、男性)ということだ。先人からの知恵が今も脈々と受け継がれているのである。

私が初めて間垣を見たときは驚いたとしか言いようがない。集落の外側から見えるのは竹、竹、竹。その風景を見に来る観光客も多いという。間垣には実用の面と、観光の面があるのだ。また、大沢と上大沢でも間垣の様子は異なっている。それぞれの集落で、間垣に対する考え方が違っているようである。

この章では間垣の作り方や補修といった面だけでなく、間垣の必要性の面についても記述していきたいと思っている。

2. 間垣の材料・作り方

ここでは間垣の材料と作り方について説明したい。

○ 基礎

間垣の基礎の丸太にはアテを使う。アテとはあすなろ(翌檜)のことである。あすなろは腐りにくく、長持ちする。だいたい30~40年ほどもつそうである。「杉の木はダメだ。使う人はいない。アテの木が良い」と言う人(70歳代、男性)もいた。

○ 縛るもの

昔は藤の蔦を山から何メートルか巻いて持ってきて使っていたそうである。しかし、それではあまりもたない。もって1年程度だそうだ。そのため、今ではロープ、ナイロン製の紐、針金(バンセン)など、それぞれの家で良いと思われるものを使っている。



写真2. 間垣の基礎の様子

○ 竹

材料となる竹はヤダケ(矢竹)である。ヤダケには油が多く含まれ、水をはじくため重宝される。また、ニガタケ(苦竹)もよく使われている。

だいたい3年くらいの竹を取ってきて、10~14日ほど干してから使われる。昔は青い竹を切ってきてそのまま差したようだが、大沢で昭和50年代に道路がアスファルトになってからは、先に山で枯

らしておいたものを差すようになった。上大沢でも今は竹を干してから使っている。アスファルトに葉が落ちるとゴミになるから、というのがその大きな理由のようだ。他にも、寝かせておいて、葉を落とし、水分を飛ばし、軽くしてから持ってくるため、という理由もあった。

間垣はそれぞれの家が自分たちで作るが、竹はどの土地から取ってきても良いということである。持ち主がはっきりとしているところからは取ってこないが、それ以外の生えているところからはどこからでも取ってくるそうだ。

30～40年くらい前の竹が残っている間垣もある。竹の寿命は60年ほどということである。

以上のような材料から間垣はできている。材料は誰かが一括して用意しているのではなく、全てそれぞれの家で調達している。

○ 作り方

次に作り方について述べる。間垣作りはとても力のいる作業である。また、竹の葉は結構な量のごみになる。力仕事は基本的に男の仕事で、ゴミの片付けなどをするのが女の仕事である。

間垣作りを簡単に説明すると次のような工程である。まず、アテの木を使って基礎となる土台を組む。そして、少しずつ竹を差して、整然と並べていく。それをそれぞれの家で使用している紐で縛って完成となる。作り方は誰に習うこともなく、見よう見まねで我流ということだ。自分のやりやすい形で間垣を作ったり、補修したりしているのだろう。

強風で石が飛んでくることもあるため、出入り口は狭くしてある。上大沢では以前は入り口が低かったが、工事をしたときに搬入しやすいように入り口を高くしたそうだ。風が家屋側から吹いてきたときにひっくり返らないようにワイヤーを取り付けるなどの工夫も見られた。

大沢では竹のみではなく、板を混ぜたり、板のみで間垣を作っていたりする家もある。その板は「コワ」と呼ばれており、製材所で要らなくなったコワ材をタダで貰ってきて、竹の代わりに使う。しかし、現在ではタダで貰えないようになってきて、代金を支払わなくてはならないそうだ。4トントラックでいくらという単位で買ってくるという話であった。コワが使われ始めるようになったのは昭和50年代頃からだそうである。上大沢にもコワを使っている家が少しだけ見られる。コワについては「木葉をコワと言ってるのかもしれんよ。なまり言葉やからね」と言っている人(80歳代、男性)もいた。

3. 間垣の補修

この節では間垣の補修の様子について説明する。

間垣はほとんど壊れるということはないが、冬のために毎年秋に補修される。内容は新しい竹を継ぎ足していくというものだ。その補修を現地では「間垣差し」と呼んでいる。

補修は10月の終わりから12月の初めにかけて行われる。自分の持分である間垣を責任を持って補修している。一斉にやるというのではなく、それぞれ自分たちの好きな日に、自分たちのペースで行

っているそうである。

昔は稲刈りが終わって、農作業が終わると、間垣の補修を始めたそうである。「ずらっと並ぶ青い竹を見ると、冬の到来を感じた」とのことである（60歳代、男性）。今では乾燥させた竹を使うため、青々とした間垣の補修の証は見られなくなった。

補修はまず竹を取ってくるというところから始められる。自分が補修をする日に合わせて、山から竹を取ってきて、10～14日ほど干しておく。前節でも書いたとおり、葉を落とし、水分を飛ばすということが重要なのである。昔は葉が付いたままだったので相当重かったそうだ。「50本へばれたら（担げたら）一人前」と言われていた。

私は運良く、大沢で間垣の補修の様子を見学させてもらえる機会を持った。以下はそのときに観察した補修の様子を記述する。

○ 大沢での間垣差し

補修を見せて頂いたのは2006年11月21日であった。その日の前後は雨だったのだが、当日は気持ちのいい秋晴れとなり、間垣差し日和だった。13時頃にNさん（60歳代、男性）のお宅に着くと、既に補修は始まっていた。

間垣に使う竹は家から1kmほどの場所に家の田んぼがあり、その田んぼの周りに生えているものを取ってくるそうだ。切った後、田んぼの周りに置いておいて、葉を落としたものを使う。補修に使う量は「男の人が担げる量が7つ（7束）くらいかなあ」と奥さんが言っていた。

補修をする日になると、竹の長さを間垣に合わせてナタで調整する。この作業は見ていると簡単そうにスパッと切れていたが、実際にやらせてもらおうと力のいる大変な仕事だった。まさしく男の仕事である。

竹の調整が終わると、いよいよ間垣に竹を継ぎ足していく作業に取り掛かることになる。家を守る高い間垣の上から竹を差していかななくてはならないため、作業は脚立を使って行われる。入り口部分はそのスペースを確保する分、竹が短くなっている。やはり、竹が短い方がやりやすそうに見えた。

竹は数本ではなく、何十本、何百本も差さなくてはならない。補修に使う竹の数はその家の持分である間垣の規模に比例している。広いと管理が大変である。

補修自体は複数人で行なうところもあれば、一人で行なうところもあるということだった。一人で行なう場合は何本かの竹の長さを調節した後、間垣に立てかけておき、それをはしごの上から取って差していくそうである。

補修は竹の古いものは取り除かずそのままにしておき、外側（道路に面した側）から新しいものを差していく。痩せ細ってきたために空いている隙間にどんどん竹を差していくのである。差すときにもコツが必要で、他の竹に邪魔をされるとそれ以上入っていかなくなるので、間に差し込んでいかなければならない。私が間垣差しを見学させてもらった家では、手鉤（のんこ）という道具を使って竹を差す隙間を作るといような工夫も行っていた。手鉤とは魚を扱う際に使う漁具である。市場で魚

をひっくり返したり、引き寄せたりするときに使っているものを想像してもらえれば分かりやすいだろう。

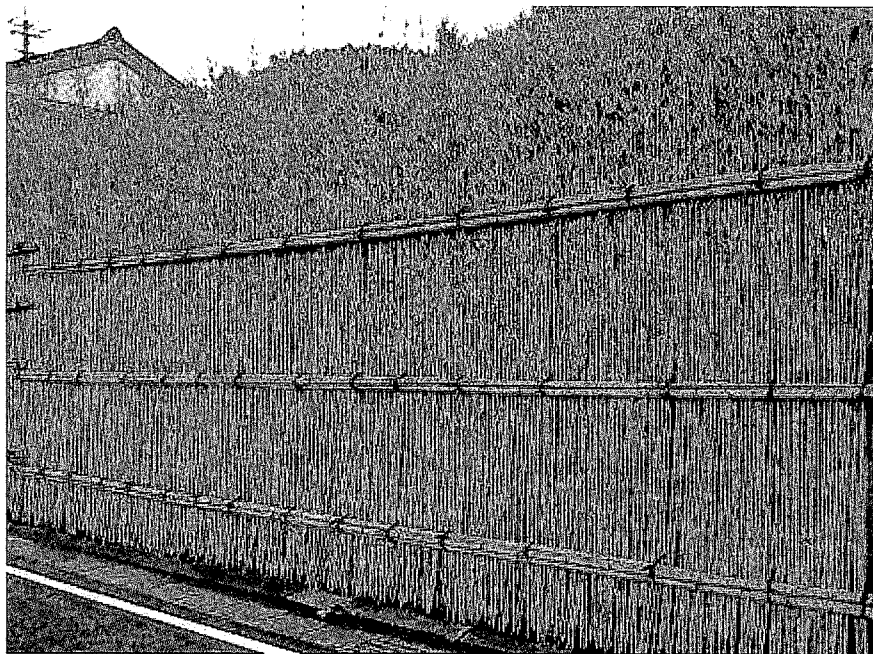


写真3 補修後の間垣

そうやっていくと古いものは自然と奥側（家に面した側）に押し出されてくる。取り除くことはあまりせず、そのまま放っておくことが普通である。

切った後のくずは野菜を育てるときの添え木にするなどして利用しているそうだ。いらなくなったものも無駄にせず使っているということが窺える。

こうして時間をかけて間垣の補修は行われる。個人の都合やその家の人手によってかかる時間も変わるが、大沢でも上大沢でもだいたい一週間くらい見ているそうだ。重労働であることは疑いなく、見ているだけで大変そうだった。また手間暇もかかる。そのため、外に出て行った若者たちが帰ってくるのできる休日に間垣差しを行うという家も多いようである。なお、間垣差しの方法も間垣作りと同様に、家々によって違う。それぞれ見よう見まねでやっているということだった。上大沢では人手がなければ、子どもが手伝うこともある。そんな中で子どもたちもやり方を覚えていくのである。

大沢では昔は竹を刈ってもいい共有の山を持っていたそうだ。今では周りの竹がなくなってきて、遠くへ行かなくてはならない。「車がないと行けないので困っている」と仰っていた（60歳代、男性）。

間垣の補修のときには竹を補充するだけではなく、基礎の部分が古くなっていたら、それを直すこともある。その冬の厳しい風をしのげるように直すことが全て補修なのである。

4. 大沢の間垣と上大沢の間垣

4.1. 上大沢での間垣の分担

大沢でも、上大沢でも、間垣は私有物である。そのため、作った人が補修も行い、ずっと管理していくことになる。基本的には自分の家や倉庫に隣接して建て、自分の家の間垣だけを補修する。他人が手伝うということはあまりないそうである。例外的に台風で壊れたときなどは近所の人が修復を手伝うこともあるそうだ。大変なときは皆で協力するということを自然にやっているのである。

ここでは上大沢での間垣の分担を見ていくことにしよう。上大沢では集会所の間垣と日吉神社の間垣の2つは集落のものとなっている。たとえば、集会所と日吉神社の間垣を補修するときは一世帯から一人が必ず出るようになっていて、日取りなどは区長が決めて、皆に知らせる。共同作業にかかる時間は2つ合わせて、1日か2日程度だそうだ。行くと決めた日に個人個人で準備した材料を持ち寄って間垣差しを行うのである。共同のものだから、という意識で皆がやっているそうだ。

その他は大沢、上大沢ともに全て個人のもので、補修などをそれぞれの家で行っている。

詳しくは次のページの地図を見てもらいたい。

地図を見て分かるとおり、間垣の分担は厳密に決められており、まさしく私有物である。この分担は代々やってきたように決まっているそうである。上大沢の人たちは間垣は個人のものであり、それを自分で作ったり、補修したりするのは当たり前だと思っているようだ。「自分の分は自分でする。個人的なことだ」と言っていた（80歳代、男性）。また、それは大沢でも同じで、間垣は作った家のものであり、それを自分たちで担当するのは当然のことだと考えている。

このように間垣の担当というものは作った人の担当である。皆、補修や管理などが大変だからと言って、他の人に任せるなどということは考えておらず、自己責任で担当している。

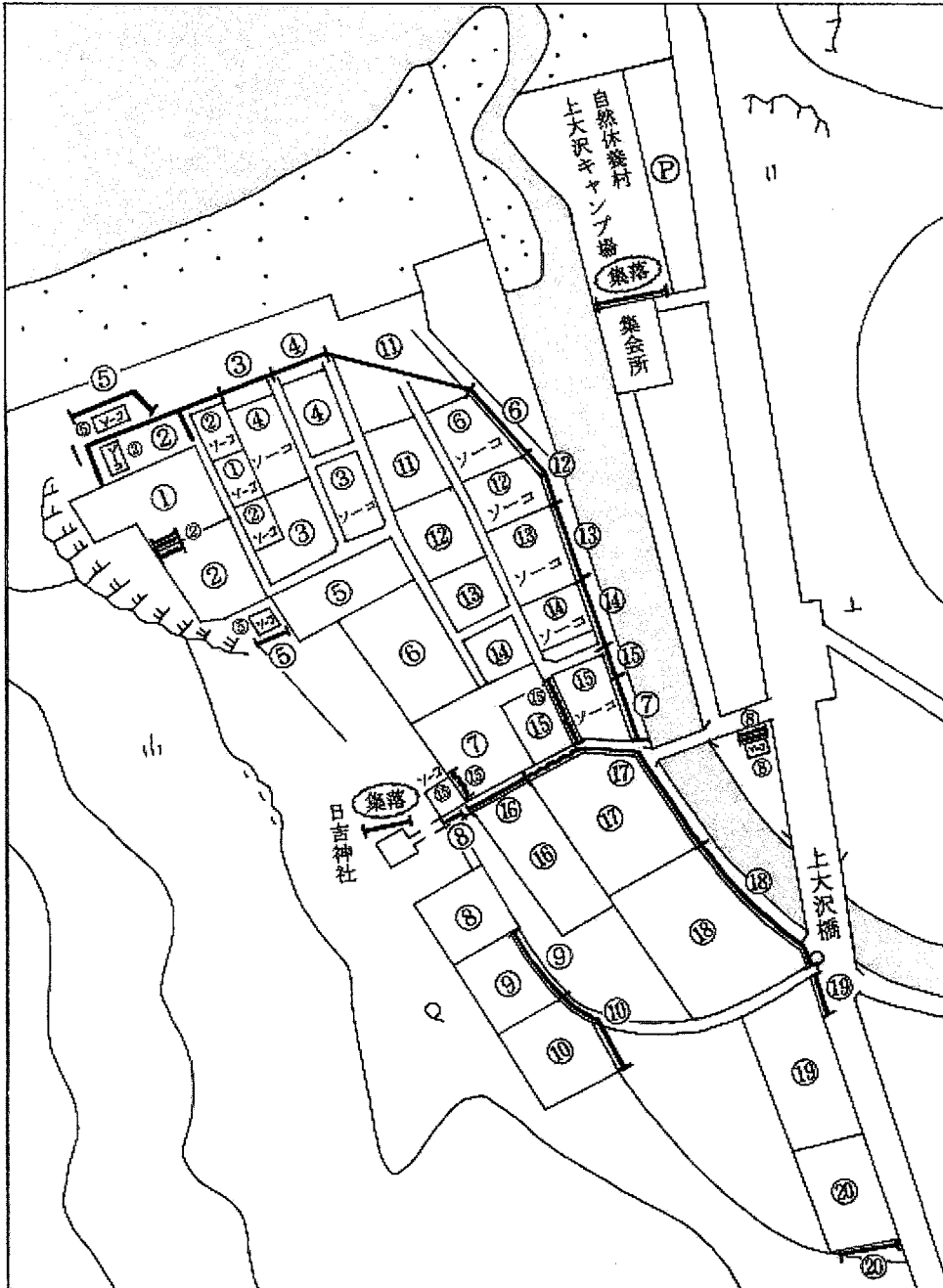
4.2. 大沢での間垣の必要性

大沢と上大沢にある間垣。しかし、その存在は双方でかなり違うようである。

2007年1月18日に補充調査で上大沢に行ったときのことである。聞いていたとおり、風が強く、ポーポーという音も凄かった。偶然、車を止めているところに雨が降ってきた。車の中にいると、海岸から風の吹いてくる側にだけ激しく雨粒がぶつかり、窓ガラスが曇った。逆側には雨粒が数的くっついていてる程度である。上大沢での風の強さを物語っているようだった。間垣の竹も風の強さのために斜めに倒れていた。これが家を守っている証なのかもしれない。そんな体験から、やはり上大沢には間垣が必要だと実感した。

それとは逆に大沢ではテトラポットや堤防の改修が年々進み、風が弱まってきている。また、大沢の漁港には波消しブロックができ、それも風を弱めてくれる要因になっている。大沢で間垣をしていて良かったな、と思うのは年に1日か2日あるくらいということだ。そのため、実際はしっかりした造りの間垣は必要なくなった。

図1 上大沢での間垣の分担地図



太線 : 間垣 (竹)

波線 : コワ

二重線: 混ざったもの (竹+コワ)

それぞれの家、倉庫に番号を振り、間垣の分担部分にもそれに対応した番号を振った。

なお、①の家のみ間垣の分担はない。

確かに、1月18日に大沢へ行ったときのことを思い出してみると、風のことなどあまり意識しなかった。少し吹いていたが、あれくらいの風なら金沢でも吹くことがある。上大沢に比べると、風の強弱は歴然としていた。

他にも大沢の人々が間垣は必要ないと思っている理由がある。Kさん（60歳代、男性）によると、大沢では江戸時代から数度の大火（宝暦3、8、12、明和2、安永6、天保9、明治29）が起こっている。間垣が火走りになってしまうのだ。昭和40年代にも1度、人が焼け死ぬ火事があった。そのせいで、大沢の人は間垣と火事に敏感になっているのである。特にお年寄りは火事を恐れているということだった。

道路ができる以前は石垣で、そこに間垣が建っていたそうである。しかし、昭和34、5（1959、60）年頃、バス路線を延長するために道路を作ったために間垣の位置が海岸から家にくっつくようになってしまった。間垣は元来家から3〜4間（1間＝約1.82m）あけておかれるものである。間垣の“ま”は“間”であり、家に近づけておくものではない。家にくっついている間垣は風を遮ってくれないのである。また、間垣を家に近づけすぎると、間垣の走り火が起こったときに家にまで燃え移ってしまう可能性がある。大沢の人々は道路の外に間垣を作りたいと訴えたが、観光にきた人が海を見られないから、と観光のために家にくっつけることになってしまった。

実際、大沢では上大沢と違い、間垣を立てる必要はないという。「本心では皆間垣は要らないと思っている」とKさんは仰っていた。そのため、大沢では間垣を竹で作っていない家も多い。たとえば、2節で紹介したコワを使ったものがある。竹だと火が怖いのだが、コワ材だと火が付くのが遅いのである。他にも、ブロックや海浜道路からヒントを得てアルミのフェンスにしている家もあった。

それほどまでに大沢の人々は間垣に必要性を感じていないのである。では、なぜ間垣を作り続ける必要があるのか。それは間垣が観光の面を持つためだ。そのことについては次節で述べることにしたい。

4.3. 間垣観光

輪島市役所では間垣を観光の目玉、観光資源にしたいと考えているという。そのため市役所が大沢や上大沢の人たちに間垣を続けるように言ってくるのだ。テレビや新聞の取材が毎年のように入り、新聞社が撮影のために間垣の補修を手伝いに来るということもあるようだ。大沢の人々は間垣は観光のためだけのものだと考えている。観光のために、間垣をやめることができないのである。

輪島市から補助も出ているが、申請をしても貰えるのは一戸4000円である。「孫の小遣いくらいにしかならんよ」（60歳代、男性）ということだった。どんなに広く間垣を作っていたとしても、補助の額は変わらない。広くても、狭くても4000円なのである。市からの補助が始まったのは昭和57（1982）年からだ。

では、輪島市は間垣観光についてどう考えているのだろうか。ここからは輪島市の観光課のHさんに尋ねて、答えてもらったものを基に記述する。

まず、実際間垣をどう使いたいと考えているのか、ということについてである。間垣は、生活の知恵として伝承されているものと考えているそうである。特徴として、間垣に使われる竹は細く 5m と長い。その竹が北風を適度にやわらげてくれる。竹がしなることによって、内側（家の側）にカルマン渦ができにくくなるという利点もある（頑固な垣根だとビル風のように渦を巻く風ができるが、竹が曲がることにより適度にエネルギーを吸収し、竹の隙間から適度に風を逃がすことで内側に渦ができにくい）。

また、間垣は毎年付け足す物で、古い物は夏に朽ちかけていく。そうすると隙間が大きくなり風が入りやすくなる。夏は風が入り涼しく過ごせるというわけだ。秋口に朽ちかけた隙間を塞ぐために、竹を付け足していく。今度は冬の強風を防ぐことになる。

間垣は、生活空間の一部であり、個人の持ち物である。住んでいる地域の生活の知恵がつまった垣根なのである。そして、間垣の継承は個人の判断に委ねられている。

輪島市ではこのように受け継がれてきたことが「光っている」として観光で紹介できると考えているようだ。しかし、基本的には、個人の物であり、無理矢理作れと言うことではないと考えている。

次は観光資源の一環として助成していることについてである。輪島市では「間垣保存会」という組織にたいして補助をしている。個人に対して補助をしているという考えではないようだ。間垣保存会とは間垣を継承保存する目的で作られた会である。間垣が作られている大沢地区の人たちで作られており、大沢地区として全員が参加している。地域全体の生活空間として受け継がれていくことを望んでいるそうである。ただし上大沢では 2005 年頃から補助を貰っていない。市がお金がないからということであった。

輪島市は間垣の知恵が優れているということが観光的要素に繋がると考え、その保存を目的とする保存会に対して補助をしている。しかし、現在、会はあるが、全員が間垣を作っているとは限らないということだった。

こうした市の助成に、問題点があることも事実である。その問題点を教えて頂いたので以下に箇条書きにした。

- 「(1) 高齢化のため、作業する人がいなくなってきた。
- (2) 竹が少なくなり、確保が難しくなってきた。
- (3) 火災がおきたとき、乾いた竹は燃えやすいので、その事を心配してブロック塀や、木の板張りにする人もでてきた。
- (4) 竹を長持ちさせるために、切ってすぐ使うのではなく、一度切った物をねかせて乾かせて、竹を長持ちさせるような作業もある。
- (5) 過疎化が進み、空き家も出てきた。
- (6) 間垣に対する地域住民の考え方が多様になっている。」

これを見ると、大沢で問題点となっていることと重なっている部分も多い。しかし、それでも輪島市は間垣が観光資源として使えるものだと考えたからこそ、間垣を続けることを大沢や上大沢の人たちに奨励しているのである。

また、間垣を見に来る観光客が多いということも事実としてある。全国から観光客が訪れ、特に海の無い県からの客が多いそうだ。テレビ放映されることもあり、夏場に人が多かったり、冬にカメラマンが間垣を撮りに来たり、歌人なども来たりと様々に観光されている。

「観光にはしょっちゅう人が来る。個人で来る人もいれば、団体で来る人たちもいる。写真を撮ったりしとるよ」(80歳代、男性)。

それだけの人が来るということは、やはり間垣には観光の要素として素晴らしい面があるということである。大沢の人々もそれを感じているから、間垣を続けているということがあるのではないだろうか。それは利益云々ということではなく、見に来る人がいるのならば、という気持ちである。

5. 考察

ここでは主に前節で取り上げた「大沢での間垣の必要性」と「間垣観光」について考察したいと思う。この二つの観点は間垣の作りなどのハードウェアの面ではなく、ソフトウェアの面とすることができる。間垣が今後どうなっていくのか、という問題に直接的に関係し、また二つの観点は密接に絡み合っている。

本来間垣とは冬の強い風を避けるための防壁である。しかし、大沢では冬の風物詩であった強い風が吹かなくなってしまった。吹かなくなったと言ってもするのは語弊があるかもしれないが、風が弱まったのは事実である。脅威になるような風がないのだから、間垣ももはや必要ない。

間垣に関する様々な問題もある。先に取り上げた間垣の走り火だけではない。人手不足も大きな問題となっているのである。上大沢は今でも若い人たちが残る、地方では一種珍しい集落とすることができる。そのため、その人手を使って間垣を補修したり、管理したりすることができる。しかし、大沢はそうではない。他でもよく見られる集落と同じように若い人はなかなか残っていないのである。若者が外へ出て行ってしまっているため、人口に対する高齢者の割合は増えている。同時に人口自体も少なくなってきたのである。そんな中では間垣の世話に掛けられる人手も限られてくる。たとえば、竹やあすなろの木などの重い材料を取ってくるときに車が使えないのは不便である。しかし、免許を持っていなければ車には乗れないのだから、誰かに頼むしかない。休みの日に子どもたちの都合を見計らって補修を行うという家もあるようだが、自分たちの都合でできなければ具合が悪いこともあるだろう。

大沢の人々は間垣を作るのをやめたがっている。壁が必要だと言うならば、間垣でなくとも、板製のものやブロック塀の方が管理も楽だし、火事の心配が少なくなる、という思いがある。しかし、輪島市による間垣観光がそうすることを引き止めているのである。

観光産業を充実させれば、経済効果が見込める。そして、観光には目玉が必要なのである。その目玉として光っていると思われたのが間垣なのだ。強い海風を防ぐための竹製の壁など他で見られるものではない。初めて見る者には物珍しく感じられる。私も例外ではなかったのによく分かる。結果として間垣を見にやって来る観光客は多いのである。

だが、間垣が観光資源になったからと言って、大沢や上大沢の人に直接利益があるわけではない。もちろん、旅館をやっている家なら別だが、普通の家には全く関係がないのである。たとえ市に利益が出たとしても、自分たちには出ないのだから、間垣を作り続ける意味はないと思ってしまっても無理はない。

こうして見ると、間垣を作り続けることが大沢の人々の負担になっているという面ばかりがクローズアップされてしまうが、違う面からも見ることができる。間垣を作り続けることが「伝統」を守ることになっているという面である。加賀の友禅や九谷焼のように間垣も代々受け継がれてきた伝統と言えるのではないだろうか。間垣は大沢や上大沢に住んでいる人々の生活の知恵から作られている。見よう見まねとは言え、作り方や補修の仕方にはそれぞれの家でやり方があるのだろう。尚且つ、間垣は他では見られない形、様式をしている。そう考えると、間垣は大沢や上大沢の貴重な財産だ。伝統的なものが観光の名物として見られるというのも当たり前のことである。

現代は伝統的なものがどんどん失われつつあるとともに、それらを見直し、残していこうという風潮が見られる。今現在、間垣があるということはそれを残す方法を考える時間があるということだ。だからと言って、それほど余裕があるわけではない。管理している人たちがお年寄りばかりになってきたということに気を配らなくてはならない。

伝統的なものとして残すとしたらどうすればいいのか。一番は上大沢のように若い人たちが間垣を継承していつてくれることだが、出て行く人たちを無理に押しとどめておくことはできない。結局、問題は集落の少子高齢化というところへ行き着くのである。間垣を観光に使うこと自体は悪くないことだと私は考えている。しかし、使うのであれば、輪島市ももう少しフォローが必要なのではないだろうか。お年寄りだけではどうにもならないこともある。輪島市が全ての面倒を見ることはできないと思う。だとしても、大沢や上大沢の人々と今後間垣をどうしていったらいいのか、ということ話を話し合い、もっと密な関係を作っていくことが重要だろう。

6. おわりに

初めて西保で間垣を見たときから報告書では間垣のことが書けたらいいな、と考えていた。他では見られず、外から見に来る人がいるほどである。まさしく日本海の特徴的なものであり、瀬戸内海で育った私には分かりやすかった。

この章では大沢と上大沢の現在の間垣の様子を見てきた。間垣がどのように使われているのか、どのように考えられているのか、ということを見てきたのである。上大沢では昔から今までずっと実用

のために作られている。厳しい冬の海風から家を守り、暮らしやすさを確保するためである。それとは対照的に大沢では他の要素により風が弱まり、間垣の必要性も薄くなってきた。その分、間垣を作ることの負担が大きくなっているように見える。

そんな間垣が今後どうなっていくのかということに密接に関係しているのが観光である。輪島市が間垣を観光に使うのと同時にその力が存続にも働けばいい。間垣は素晴らしいものなのだ。私個人の意見としてはこれからも間垣という伝統が続いていつて欲しいと思っている。